日本語のテンス、アスペクトの解析のアルゴリズム

草薙　裕

1. はじめに

本稿はコンピュータによる自動解析のための日本語のテンス、アスペクトのアルゴリズムの記述の方法を論じることを目的とする。

自動処理では文が曖昧であると、その意味のすべてを記述するしか方法がない。しかし、その言語の母語話者が文脈の中で実際に使われた文を曖昧だとはとらず、一つの意味だけを読みとるとすれば、自動処理でも、二つ以上の意味ではなく、その母語話者の理解する唯一の意味を記述すべきである。自然言語の文法や語彙には文を曖昧にする要素が多いがそれが組み合わされて文脈で用いられた場合、話し手の意図することが、聞き手にそのまま伝わる方がはるかに多い。

本稿では日本語のテンス、アスペクトに関して、自動解析に必要な、文の要素にはいかなるものが必要かを考えるものである。また本稿では実際に用いられた文の解析を目ざし、23の小説、随筆、紀行文、時評などから約550の文をとり、コンピュータに記憶させ、いろいろの文法事項によって該当する文を検索し検討していく(註1)。

また、本研究では「読みはじめる」、「書きつづける」、「話しおえる」などの「はじめる」、「つづける」、「おえる」などの表現は語彙カテゴリーと見做し、テンス、アスペクトの言語表現とは「タ」形と「ル」形の対立（テンス）及び「テイル」形とそれのない形の対立（アスペクト）のことを指す(註2)。なお、文献9でも、従属節と関係節のテンス、アスペクトの解釈を言語学的に論じているが、本稿は、あくまで、アルゴリズムに必要な要素を見つけるという発想で進めて行く。

2. テンス、アスペクトの定義

日本語のテンス、アスペクトの表現は、他の言語でも見られる様に、一つの実世界の現象（言語外現象）に対して、いろいろの表現が可能でたとえば、同じ現象に対し、「食事をした」とも「食事をしていた」とも言えるし、「食事をしている（とき）」とも表現する。また「彼は私の手紙を読んでいた」という表現は、ある時点で「読む」という現象が実際に目前で起こっていた場合と、その現象が、その時点以前に起こり、その結果が残っていた、という意味にも用いる。

すなわち、言語外現象と言語表現との間には一対一の対応がなく、話者の認知が介在している。テンス、アスペクトに関してはこの話者の認知を、時に関する焦点の置き方と考えれば、言語外現象と焦点の組み合せと、言語表現の間に写像関係が成立する。

まず、焦点を、どんな現象に、また時の流れのどの時点に話者の注意が向けられているかということ、とする。そして言語外現象を次の様に分類する(註3)。

静態――出来事としてではなく、存在として認知される現象で、それが続いている間は内的に変化のないもの。

動態――何か起こる出来事として認知されるもので、内的な変化が考えられる。

静態は当然、時間的に継続するのに対し、動態は瞬間的なものと継続するものがある。また動態の結果が存続するなら、それは静態が存在すると見做す。

テンスは現象の時間と他の時間、通常話す瞬間、とを関連さすもの、というのが一般的な定義であるが(註4)、前述の通り、言語外現象と言語表現には写像関係が成立しない。

たとえば、机の上に二日前から本が置いてあったとすれば、それを「この本はきのうもここにあったが今もある」というように表現できることは、「きのう」に焦点があたれば、「あった」になり、今にあたれば「ある」になることを示している。

また、テンスには、いわゆる絶対テンスと相対テンスがある。それぞれのテンスを次の様に定義する。

絶対テンス――現象にあたっている焦点と発話時点との時間的前後関係を

表わす言語表現。

相対テンス――焦点のあたっている現象と第二の現象との時間的前後関係を表わす言語表現。

さらに、絶対テンスは、焦点の方が時間的に前なら「過去」、同じなら「現在」、後なら「未来」となり、相対テンスは第二の現象が先なら「前」、同じなら「同」、後なら「後」となる。

次にアスペクトは、一般的に現象の時間的内部構造に対する見方というように言われている(註5)。これに焦点の概念をあてはめれば、定義が明確になる。すなわち、動態の場合、その現象の継続時間と焦点のあたっている、時の期間の長短関係でアスペクトが決定されると見ることができる。動態が瞬間的なものであれば、常に焦点の時間の方が長く、完了相になる。一方動態が継続的な現象の場合、焦点の時間の方が長ければ完了相、短かければ未完了相となる。静態の認知は不変化であるので、焦点の方が常に短くなる（もし静態の継続時間より、焦点の時間の方が長ければ、そこに静態のはじまり、あるいは、終りが認知されるわけで、これはもはや静態ではなく動態として認知されることになる)。

これをまとめると、

	言語外現象	焦点		
動態	瞬間的	言語外現象より大	――	動態完了相
	継続的	〃	小 ――	動態未完了相
静態	継続的	〃	小 ――	静　態　相

となる。

3. 日本語のテンス、アスペクトの生成

前項で述べたテンスとアスペクトの組み合わせで、それらを表わす言語表現が生成されるわけだが、日本語では組み合せの結果、「ル」、「タ」、「テイル」、「テイタ」のいずれかが現われる。日本語では相対テンスと絶対テンスが形式的に区別されない。しかし動態未完了相と静態相は焦点の方が言語外現象より短かいという定義から、第一の現象にあたっている焦点は第一の現象と前か後にずれている第二の現象にはあたらない。したがって動態未完了相と静態相は相対テンスの前又は後は現われない(註6)。またテンスの基準点（絶対テンスでは発話時点、相対テンスでは焦点のあたっている現象の時点）と同時に起る

現象は焦点より短かく認知されることはなく、動態完了相の絶対テンスの現在および相対テンスの同はない。

テンスとアスペクトをまとめると図Ｉのようになる。

図 I

テンス／アスペクト	絶対テンス			相対テンス		
	過去	現在	未来	前	同	後
動態完了相	タ		ル	タ		ル
動態未完了相	テイタ	テイル	テイル		テイル	
静態相	テイタ タ	テイル ル	テイル ル		テイル ル	

静態相はいろいろの言語形式であらわれる。形容詞、形容動詞、名詞に続く助動詞などあるが動詞では、通常「テイル」、「テイタ」を持たない動詞などの「ル」、「タ」があり、さらに他の動詞の「テイル」、「テイタ」でも表わされる。金田一は文献２でいわゆる瞬間動詞に「テイル」形がついたものが本稿の静態相であるとしているが、金田一自身も述べている様に、他の動詞に「テイル」形がついたものも静態相になりうる。文生成の過程では話者が動態として認知するか、静態として認知するかが問題であり、現象の認知によって、それが静態相になったり動態未完了相になったりする。

4. 日本語のテンス、アスペクトの解析

前項で見た通り、テンスとアスペクトを表わす動詞の形は四つであるのに対し、それが絶対テンスと相対テンス及び三つのアスペクトの組み合わせで、12の意味が出て来るわけだ。同じ形が異なる意味を表わすものをあげると、

① 絶対テンスと相対テンス

動態完了相の過去と前

〃　　未来と後

動態未完了相の現在・未来と同

静態相の現在・未来と同

② 動態完了相と静態相

過去

未来

③　動態未完了相と静態相

過去

現在・未来・同

となり、これより明らかに、テンス、アスペクトの言語表現だけの情報では、それを表わす意味を特定することはできない。したがって、テンス、アスペクトの解析は文中の他の要素を手がかりにしなければならない。

最初に、絶対テンスと相対テンスを判別する要素を考察する。

まず考えられるのが、テンスの言語表現が文中のどこに現われているかということである。いいかえれば、節の種類によって絶対テンスか相対テンスかがある程度限定される。以下テンス判定という観点から節の種類を考えていく。

A.　一定の形が現われる節

これは動詞語尾や後続語が「テカラ」、「テイライ」、「アト」、「トタン」、「マエ」、「ウチ」、「アイダ」で時の順序を表わす節と、「バ」、「ト」、「タラ」、「テモ」などで条件を表わす節が含まれる。

時の順序を表わす節は上記の語尾や後続語自体がこれらの節の現象と主節の現象の時の前後関係を表わすものであるから、動詞の形は時の順序に関する限り冗長である。したがって次の例で示す通り「テカラ」、「テイライ」にはテンスの形がないし、「アト」、「トタン」の前は必ず「タ」形、「マエ」、「ウチ」、「アイダ」の前は必ず「ル」形になっている。

(1)　私は真面目な話であることを説明してから一気に喋りました。(武田泰淳)

(2)　……面白い番組がすんだ後も、パチンと切る。(永井龍男)

(3)　……一口飲んだとたんに奇妙な顔をし、それでも「ウシュワ」(うまい)と言った。(本多勝一)

(4)　……歌も歌わぬうちからたちまち有名人になってしまった。(深代惇郎)

(5)　……今までよりはずっと手早く見てゆくあいだも、……上原は黙りこんでいた。(丸谷才一)

これらの従属節の表現は、絶対の時間に関係なく、主節の現象に対する従属節の現象の時間的前後関係を示すもので、相対テンスである。

条件を表わす節も、次の例のように動詞の形が固定している。

(6)　スイッチを一ひねりすれば、立ちどころにテレビと別れることができる。(永井龍)

(7)　全国的な選挙が始まると、ポオル・ムウリスと同行して……書類を整理した。(大佛次郎)

(8)　……うごきや顔つきをみていると、やがて日本の風俗が、みんなこのように架空なものになってしまうのではないかという惧(おそ)れをおぼえる。(安岡章太郎)

(9)　……席へもどったらまだやってたんだからおどろく。(サトウハチロー)

(10)　開票は十一日になっても、はかどらない。(大佛)

これらの表現は、従属節の現象が主節の現象の条件になるから、時間的には従属節の現象の方が後になることはない。したがって、相対テンスの前ないし同になる。(8)のように「テイル」形であったり、「テイル」形を持たない状態動詞であると、相対テンスの同を意味し、その他は前である。

B.　絶対テンスが主に現われる節

相対テンスは簡単に言えば、二つの現象の時間的順序を示すわけであるから、一つだけの現象を述べる場合は原則として相対テンスは現われない。しかも、相対テンスは従属している節の現象に関しての標識である。したがって主節に現われるのは原則として絶対テンスである。また「トイウ」といった引用の節、接続助詞の「ガ」の節なども同様である。

ただ主節に現われるテンスの表現の中にも相対テンスと見做した方がいいのもあるようで、本研究のデータの中にも、たとえば、次のようなものがあった。

(11)　バスは鳥居の傍(そば)で止った。客はぞろぞろと鳥居をくぐってゆく。境内では数カ所に篝火(かがりび)が焚かれていた。(松本清張)

(12)　コボマー家のために、私たちはまず湯をわかして粉ミルクを作った。……だが、こんどは立場が逆になった。最後にミルクを受けとったユガオママラは、次にまわす人がいない。残ったミルクをどうしたものか、困りきっている。……(本多)

という様に明らかに過去の情景描写で「タ」形を使っているが、それにまじって「ル」形が現われる。これは相対テンスだと考えるのが妥当だと思うが、そのほとんどは「テイル」か「テイル」形のない状態動詞である。ただ(11)の「くぐってゆく」の様な「テイク」、「テクル」があることを指摘しておく。この

種の用法は小説や紀行文に見つかったが、これをアルゴリズム化することは今後の課題にする。

C.　相対テンスが主に現われる節

時の順序を表わす節のうち「トキ」や「コロ」を含むもの、条件を表わす節のうち「ナラ」、「トシタラ」などを含むもの、理由や逆説を表わす「ノデ」、「カラ」、「タメ」、「ノニ」などを含むもの、また形式名詞の「ノ」、「コト」などが受ける関係節には「ル」形と「タ」形が対立している。

まず、「トキ」や「コロ」は意味的に二つの現象が同時に行われたことを表わす様に見えるが、実際にはその二つの現象の時間的順序に微妙な差異を表わす。

(13)　先日のこと、……同じ番組に出るタレントの諸氏と雑談しているとき談タマタマ野球のことに至ったので、……「野球ユニホーム滑稽説」を口にしてしまった。(三国一朗)

(14)　……近代的食物をかれらの家でとるときには、あらゆる容器も持参で行かなければならない。(本多)

(15)　正確には記憶していないが、芥川龍之介の言葉に、「どんな女でもラブレターをもらったときよりもパラソルを買ってもらったときの方が瞳を輝かす」という意味のものがある。(吉行淳之介)

(13) は主節が「タ」なのに従属節は「テイル」が用いられており、明らかに相対の同である 。(14) の「ル」は「タ」にすると文が意味をなさないし、(15) の「タ」を「ル」にすると意味が微妙に違ってくる。この違いは次の例で明らかだろう。

(16)　日本へ来るとき、ぼうしを買った。

(17)　日本へ来たとき、ぼうしを買った。

(16) の「ぼうしを買った」のは外国であり、(17) では日本である。これを見ると、「トキ」の節では「ル」形が相対の後、「タ」形が相対の前を表わすと言える。また「コロ」も同様であるが、データに次の例があった。

(18)　娘達が家にいた頃は、意見がくい違って、見たくない番組の時は、……さっさと書斎へ引込んでしまった。(永井龍)

この場合「いた」という動詞は「テイル」形を持たない、いわゆる状態動詞で静態相を表わしている。「トキ」や「コロ」の節には「テイタ」や状態動詞の「タ」が現われるが、第二項で論じた様に、焦点の方が言語外現象より小であ

る動態未完了相及び静態相は、第二の現象が時間的に第一の現象の前か後である相対テンスの前及び後とは両立しない。したがって、「トキ」や「コロ」の節に現われる「テイタ」や状態動詞の「タ」は絶対テンスと見るべきであろう。

また形式名詞の「ノ」や「コト」が受ける関係節を見ると、

(19)　テレビの古くなったのは、自動車の古タイヤ同様屑屋も持って行かぬので、そんな工夫をしてみたのであった。(永井龍)

(20)　彼女が恐怖と嫌悪におそわれているのがよくわかりました。(武田)

(21)　そのひとは、英語、ドイツ語、フランス語の読み書きができまた喋ることも自由にできる人であった。(富岡多恵子)

の例の様に、主節が「タ」形である文の関係節に「タ」形も「ル」形も出ており、意味から「タ」は前、「テイル」は同、「ル」は後と相対テンスであることがわかる。ただ、

(22)　……セヴン・スターズ下さいというのを聞いたことがある。(富岡)

の様に主節の動詞が「見る」や「聞く」などの感覚動詞の場合「ル」が同になることがある。

次に条件を表わす「ナラ」、「トシタラ」の節、及び理由、原因、逆説などを表わす節を見てみよう。

(23)　おもいやりがあるならば……つかれさせることはない。(サトウ)

(24)　みんながごく自然にセヴン・スターズ下さい、というとしたら、これも一大事なのである。(富岡多恵子)

(25)　「そんならブタにやるから、もらっとく」(本多)

(26)　話がここまで来たから言わしていただくが……(三国)

(27)　その著書は、いくつか翻訳がでているので、わたしもそのうち二つをよんだ。(梅棹忠夫)

この種の条件節は何かを想定するものであり、主節が非過去の場合、話者がその想定をした時点での判断や意志を主節で述べるものであるから、従属節のテンスの基準点は発話時点より後になることはない。したがって、主節が非過去の場合相対テンスと絶対テンスの区別はつけがたいのは (23) や (27) を見ればわかる。主節が過去の文はデータの中になかったが、たとえば、

(28)　彼女がパーティーに来たなら、早く帰らなかったろうに。

では、この文が「来た」ことが事実であれ、反事実であれ、この「タ」と「ル」はこの位置で対立し、「帰った」時点の前か後かを示す。したがって、これは

明らかに相対テンスである。

また、理由、原因、逆説などを表わす文もこの種の条件節と同じで、たとえば仮に理由が前で、結果が後、そして両方とも未来の現象とした場合、この意味で、

(29)　病院へ行ったから、学校に遅れる

とは言えないのは、「病院へ行く」という理由になる現象が発話時点では、実際に起るかどうか断定できない。したがって判断の出来る発話時点を基準にして、

(30)　病院へ行くから、学校に遅れる

となる。しかし、主文が過去であれば、理由などになる現象に関して話者が情報を得ているはずで、

(31)　ブタにやるから、もらった

(32)　太郎が来たから、いっしょに外へ出た

の様に、「ル」形は相対の同又は後、「タ」形は相対の前を表わす。同様に (27) の「でている」も「よんだ」時点と同と解釈できよう。

D.　絶対テンス、相対テンスが現われる節

名詞が受ける関係節のテンスは複雑である。まず相対テンスの例を示そう。

(33)　……午後には議会が召集せられるボルドオ市に出発する用意に書類を整理した。(大佛)

(34)　先日のこと……同じ番組に出るタレントの諸氏と雑談しているとき……「野球ユニホーム滑稽論」を口にしてしまった。(三国)

(35)　つい先日の新聞に、テレビの外箱を利用して小鳥を飼っている写真があった。(永井龍)

これらの関係節は、主節が「タ」であることから、明らかに、「ル」で表わされている現象は時間的に主節の現象の後であり、「テイル」は同である。(33) の「召集せられる」は「召集せられた」に、また (34) の「番組に出る」は「番組に出た」に代えることができる。もっとも「ル」が「タ」になれば、時の順序がかわり、関係節の現象の方が主節の現象の前になる。ところが、(33) の「出発する」、(35) の「飼っている」は「タ」形にはならない。前者は関係節を受ける名詞の意味が、何かの行動の前を表わすもの、たとえば、「用意」、「準備」、「仕度」、「計画」、「対策」、「案」などの場合であり、後者は関係節が不変の内容、したがって「絵」、「写真」、「映画」、「歌」、「文書」、「映画」などの場合があてはまるようだ。ただし同種の名詞でも関係節が内容ではなく、外観なら

(37) のように、「テイタ」にもなり得る。

(36)　大雑誌に載っている匿名コラムには、……(筒井康隆)

(37)　大雑誌に載っていた匿名コラムには、……

またデータの中には、(38) の様に明らかに絶対テンスを表わしているものもあった。

(38)　いままで和やかにつづいていた談笑のフンイキが、一瞬にして、シーンと白けかえってしまったのである。(三国)

ところが、

(39)　そのとき彼らが私をとがめた顔つきを、私はまざまざとおぼえている。(三国)

(39) の様に主節が「ル」形で、関係節が「タ」の場合、絶対テンス（現象が過去に起った）か、相対テンス（主節で述べられている現象の前に起った）かを判断するのはきわめて困難である。もし、関係節の中の現象が過去に起ったものなら、絶対テンス（過去）であっても相対テンス（前）であっても意味に違いはない。ただ (39) は「そのとき」という副詞句があるため「とがめた」が「とがめる」になることはない。したがって、(39) の「タ」形は絶対テンスの過去としなければならない。ところが、たとえば、

(40)　読んだ本はちゃんとかたづけなさいよ。

においては、発話時点でまだ読みおわっていない場合も考えられ、その時は「読む」は未来でありながら「タ」形で表わされており、これは相対テンスの前でなければならない。

関係節の中には絶対テンスも相対テンスも可能であるとすべきだろう。ただ絶対テンスが表われる場合は文中にそれを示す何らかの標識がある場合に限られるようである。(39) の「そのとき」がその標識にあたる。その他、過去を表わす副詞、たとえば「昨日」、「先年」、「昔」、「先日」などや具体的な日時、たとえば「昭和35年に」、「十年前」などである。たとえば、

(41)　その日、駅の前を車で通ると、そこには、その晩事故にあったバスに乗る人がならんでいた。

を見ると、「事故にあった」、「乗る」、「ならんでいた」はすべて過去の現象であり、時の順序でいえば、前より後の順序で、「ならぶ」、「乗る」、「あう」であるが、無標の「乗る」が主節の「ならぶ」に対して相対の後を示すのに対し、「あった」は同じく「ならぶ」の後であるのに「タ」形になっているのは標識の「その晩」のため絶対テンスになっていると言える。

次にアスペクトの解析について考えてみる。前述の通り、日本語では「テイル」形が動態未完了相と静態相を、また「ル」と「タ」が動態完了相と静態相を表す。金田一は文献2で日本語の動詞を継続動詞、瞬間動詞、状態動詞、第四種の動詞に分け、状態動詞は「テイル」形がつかぬもの、継続動詞に「テイル」形がつけば原則として、本稿でいう動態未完了相、瞬間動詞に「テイル」形がつくと、本稿の静態相になるとしている。たとえば、

(42)　ウェリー氏は、生前、日本のすべてを知っていたのではない。(永井道雄)

(43)　……女のあつかうものとされていた食事の用語をはじめ……(大久保忠利)

(44)　私はその夜、彼女が両親を前にして、どんなに心乱れながら坐っているか想像ができました。(武田)

(45)　テレビカメラが回っている間だけは、……(深代)

(46)　拝殿には、絶えず柏手(かしわで)が起っていた。(松本)

のうち、(42)と(43)は瞬間動詞で明らかに静態相である。また(44)と(45)は継続動詞で動態未完了相を表わしている。ところが(46)の「起る」は、たとえば、

(47)　事故が起っていた

では静態相であるのに対し、(46)では動態未完了相であろう。

基本的に静態相を表わす動詞が動態未完了相を表わす場合には、「絶えず」、「ひっきりなしに」、「しきりに」、「見る見る」、「だんだん」、「日増しに」、「着々」、「次々に」など時の継続に関連のある副詞が文中にあることで判定できる。

また、たとえば、

(48)　夢声先生が若き二人がどうしてむすばれたかを、三分ほどやって、あとはパクつきだけだったと聞いている。(サトウ)

(49)　関門海峡トンネルは、この早鞆(はやとも)ノ瀬(せ)の下をくぐっている。(松本)

(48)の「聞く」も(49)の「くぐる」も継続動詞だが、両方とも静態相を表わしている。(48)は「と聞いている」の「と」が、すなわち、引用であることが、また(49)は「トンネル」が「くぐっている」ということで、主格が無生物であることがきめ手となる。

一方、静態相と動態完了相の区別は比較的簡単なようだ。すなわち、

(50)　責任ある大人になるのがいやで、子供の境遇にしがみついていたいわけだ。(富士正晴)

(51) 今は情報が多すぎる時代で……（山本夏彦）

(52) そのひとは、英語、ドイツ語、フランス語の読み書きができまた喋ることも自由にできる人であった。（富岡）

(53) 成人の日という言葉を毎年耳目にする度に、……（富士）

の（50）から（52）のように、「テイル」の形を持たない動詞はいわゆる状態動詞で、「ル」、「タ」が静態相を表わす。また（53）のように動詞自体は状態動詞ではないが、「という」とつながり、関係節に現われる場合は必ず静態相を表わす表現もある。

5. おわりに

以上見て来た様に、日本語のテンス・アスペクトの解析には、いろいろの、文中の要素に関する情報が必要である。これは単に文中にある文法事項にとどまらず、次のような動詞や副詞句の分類もしなければならない。

1. 言語外現象が必ず瞬間的な変化を表わし、決して時間的に継続しないものに対応する動詞（たとえば、「知る」、「とされる」など）。〔仮に瞬間動詞と呼ぶ〕
2. 原則的に瞬間的な変化の言語外現象だが、状況によりその変化が時間的に継続すると認知されるようなものに対応する動詞（たとえば、「起る」、「（電気を）つける」など）。〔仮に変化動詞と呼ぶ〕
3. 「テイル」形を持たない動詞及び表現（たとえば、「ある」、「という」など）〔仮に状態動詞と呼ぶ〕
4. その他の動詞〔継続動詞〕
5. 変化動詞が動態未完了相を表わすことの標識になる副詞（句）（たとえば「絶えず」、「だんだん」など）。
6. 継続動詞が静態を表わすことを示す文中の要素（たとえば「聞く」に対する「と」、「くぐる」に対する無生物主格など）

以上の様な記述が完全に出来れば、文中の要素だけからのテンス・アスペクトの解析が母語話者の解釈に近く出来るようになるだろう。

最後のまとめとして、アルゴリズムを次頁表にまとめておく。

I. テンスの解析

	判定要素			テンス
	節に関する要素	その他の要素	テンス・アスペクトの表現*	
1	――――		テイタ	絶対の過去
2	「テカラ」「テイライ」「アト」「トタン」		――――	相対の前
	「マエ」「イゼン」			相対の後
	「アイダ」「ウチ」			相対の同
3	「バ」「ト」「タラ」「テモ」		テイル	相対の同
			その他	相対の前
4	主節**，「トイウ」		タ形	絶対の過去
	接続助詞「ガ」		ル形	絶対の非過去
5	「トキ」「コロ」***		タ	相対の前
	「ノ」「コト」が受ける関係節		テイル	相対の同
			ル	相対の後
6	「ナラ」「トシタラ」「ノデ」「カラ」「タメ」「ノニ」	主節が「ル」形	タ形	絶対の過去
			ル形	絶対の非過去
		主節が「タ」形	タ	相対の前
			テイル	相対の同
			ル	相対の後
7	名詞が受ける関係節	時を示す副詞(句)が節中に存在	タ	絶対の過去
			ル	絶対の非過去
		その他	タ	相対の前
			テイル	相対の同
			ル	相対の後

* 状態動詞は「テイタ」，「テイル」に含める
** 小説の情景描写などには相対テンスが現われる可態性がある
*** 主節が感覚動詞の時は「ル」が相対の同にもなる

II. アスペクトの解析

動　詞*	文中の要素	アスペクト表現	アスペクト
状態動詞	—	—	静態相
瞬間動詞	—	テイル形	静態相
		その他	動態完了相
変化動詞	「絶えず」「だんだん」などの副詞（句）	テイル形	動態未完了相
	—		静態相
		その他	動態完了相
継続動詞	特殊表現	テイル形	静態相
	—		動態未完了相
		その他	動態完了相

* この動詞の分類は本稿の仮説による

註

1. これらのデータは小田切秀雄他編『現代文章宝鑑』（柏書房、1979）に収録されているもの22編と松本清張著『時間の習俗』（新潮文庫版、1972）であるが、例に用いたものは著者の名前だけ記してある。
2. 「読む」、「見る」などの語尾の総称を「ル」で表わし、「読んだ」、「書いた」などを「タ」で表わす。また、「読んでいる」、「読んでいた」などを意味する時は「テイル」形と称し、「ル」と「テイル」をまとめて「ル」形、「タ」と「テイタ」を「タ」形と呼ぶ。
3. 文献10参照。
4. 文献1参照。
5. 同上
6. 文献5では「テイタ」も本稿でいう相対テンスであるという解釈をしている。

文　献

1. Comrie, B (1976). Aspect. Cambridge Univ. Press.
2. 金田一春彦 (1950).「国語動詞の一分類」、『言語研究』15.
3. —— (1955).「日本語のテンスとアスペクト」、『名古屋大学文学部研究論集』X.
4. —— (編) (1976)、『日本語動詞のアスペクト』、むぎ書房
5. 久野 暲 (1973)、『日本語研究』、大修館
6. 草薙 裕 (1972). "Time Focus within the Japanese Tense System". Papers in Japanese Linguistics. 1-1.

7. ——(1975).「言語活動における認知作用——意味論における一仮説」、『言語の科学』6.
8. —— (1980). "A Model of Natural Language Processing of Time-related Expressions", Proceedings of the 8th International Conference on Computational Linguistics.
9. —— (1981)、「従属節および関係節におけるテンス・アスペクトについて」、『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館
10. Lyons, John. (1977) Semantics: 2. Cambridge Univ. Press.